

こわかった地震

星野 貴秀

十月二十三日地震は起きた。ぼくはがソ  
リンスタンドの近くを家の人と車で走って  
いた。地震がおきる前にバスとすれちがった。  
そのあとおきた。車のハンドルがいうことを  
きかず、家の人はい

「タイヤがパンクしたのか。」  
と言った。ぼくもそう思った。ところがあ

りもゆりゆりゆれていたので

「地震だ！」

と言った。車までなるとか前にすすむことが  
できたが道がもりあがりぼくは思わす

「こわいよ。」

と言った。そのあと車からおりてがソリンス  
タンドまで走ってにげた。ゆれていたの  
で弟のサングルがどこかにいたのでは  
たして走った。パニツクじょうたいに  
なりました。ソリンスタンドに行くのが  
おくれた。しよ

うぶ地区のサイレンがなりはじめた。ぼくは頭が真、白になつた。ただこわいというこゝしかなかつた。がソリスタンドに行つたら運がよく人が三人ほゞいてうれしかつた。がソリスタンドの人が

「あたたかい飲み物があるよ。」

と言つたのでなんでもよかつたのでコーヒを飲んだ。間内平からたすけにきてくれた。ぼくはこれですかると思つた。だけど弟ははたして走つてケガをしたので知りな

い人が弟をおんぶしてくれた。知らない人がおんぶしてくれてうれしかつた。間内平のプレハブ小屋に入った。大ぜいの人がいてきうくて大変だつた。するとクレーンがもう一つのプレハブ小屋をもつてきてくれた。ぼくたちはそのプレハブ小屋に入った。ぼくは口ウソクのおいがしてくるしかつた。

や、と次の日になつた。よ震は昨日より少なくなつたので歩いてもどつた。祖母にあえてうれしくてかきろうになつた。みんかにあ

6

5

え  
て  
う  
れ  
し  
か  
つ  
た。